割烹着な人びと

奇妙なうわっぱりをめぐる冒険③

加藤ジャンプ

いよいよ割烹着がわからなくなってきた――。

先日、BSトゥエルビで『ムー』の再放送が始まった。

プロデューサーは久世光彦。TBS系で一九七八年に放送されたホームドラマである。舞台は新富町の足袋屋、うさぎや。

すっかり忘れていたが、この店の女将さん役の渡辺美佐子が割烹着を着ていた。はたと気づいたが、もしかすると、これが私の割烹着の原風景なのである。このドラマが放送された年、私は小学校に入学した。たしかに、それ以前にNET系で放送されていた『だいこんの花』で加藤治子が割烹着を着ていた記憶が鮮明に残っている。ただ、あちらは、大坂志郎の妻役で、仕事場である小料理屋のシーンで着ていた。つまり、仕事着として着ていたのである。

一方、『ムー』の渡辺美佐子は、客前では割烹着を脱ぐ。台所仕事のときに着て、そのままの格好で帳簿をつけたりもすることもあるが、基本台所仕事などの際に纏っていた。一方で、仕事のときは法被を着ており、割烹着は脱いでいたのである。

つまり『ムー』のなかでの割烹着は、まったくの、家庭内での仕事のための上っ張りだった。そして、そういう使われ方をする割烹着を初めて見たのが、たぶん、この『ムー』だったのである。

しかも、このドラマでは、悠木千帆から改名したばかりの樹木希林演じる通いのお手伝いさんが登場し、このお手伝いさんは、いつも洋装なのに割烹着を着て仕事をするのである。しかもその割烹着は柄物である。

あれ？　なんだか、おかしい。

なにしろ、それまでは、私にとって割烹着は間違いなく「プロ」のユニフォームだったのだ。

一九七八年、昭和五十三年。我が家で、母親が割烹着を着るところを見たことは一度もなかった。また、学校の友人の家庭でも割烹着は全然見かけなくなっていた。しかし、当時でも、近所の蕎麦屋や寿司屋でも店の人が割烹着を着ていた記憶がある。要は、プロたちが作業着として着ていたのである。そして同じ時代『ムー』のなかでも、お手伝いさんの樹木希林はプロの作業着として割烹着を使う一方で、女将さんは、あくまで家庭内の仕事の作業のために割烹着を着ていた。

では、果たして、割烹着はプロ用なのか素人用なのか？

たしかに「割烹着」と呼ばれる以上、台所とその周辺、つまり家事のための上っ張りであることは疑いのないところである。家事がなくならない以上、割烹着が姿を減らす理由はないのではないか。それなのに、なぜ、今、割烹着は死語になりつつあるほど着られなくなっているのか。

だったら、と私ははしゃいでしまった。居酒屋しかない、ではないか。

私にとって、最も身近に割烹着が現役として活躍している場所だからだ。酒好きも、こういうときには役に立つ。

それでいそいそと出かけたのが二軒の店である。飲みながら、取材ができる。ついている。

第一回で訪れた、割烹着に着替えるといきなり「女将さん」に変身するという横浜のもつ焼き屋。訪れたのはいいものの、臨時休業を知らせる張り紙を格子戸に残したまま、まったく再開の素振りを見せなくなってしまったのである。

●かとう・じゃんぷ　1971年東京生まれ。文筆家。横浜とジャカルタとジョグジャカルタとクアラルンプールで育つ。著書に『コの字酒場はワンダーランド』（六耀社）など。タイトル、本文中のイラストも筆者。